

実証ほ成果 - 6 【WCS用稲の新品種導入による作業労力の分散化のための実証】

1 目的

当地域の畜産は、農家の高齢化が進む一方、飼養規模の拡大化も進んでおり、いかに粗飼料を安定的に確保するかが課題となっている。

一方、水田におけるWCS用稲の作付面積は飛躍的に増加しており、飼料生産作業受託組織によるWCS用稲の作業受託面積も着実に伸びてきている。

WCS用稲は晩生品種が栽培されており、収穫時期が一時期に集中するために栽培面積の増加に伴う収穫時の作業労力不足により繁忙を極めるとともに、収穫適期に収穫できずWCSの品質にバラツキが生じている。

そこで、WCS用稲の中生品種の導入による作業労力の分散化の可能性について実証し、今後の粗飼料の安定的確保に資する。

2 方法

(1) WCS用稲の中生品種の栽培実証

- ア 設置場所 東串良町新川西
- イ 供試品種 ①ホシアオバ（中生）
②たちあやか（中生）
③ミナミユタカ（晩生）
- ウ 移植 平成29年5月14日（3品種）
- エ 作付面積 いずれも50アール
- オ 成熟調査日 ①平成29年8月7日（中生）
②平成29年8月21日（晩生）

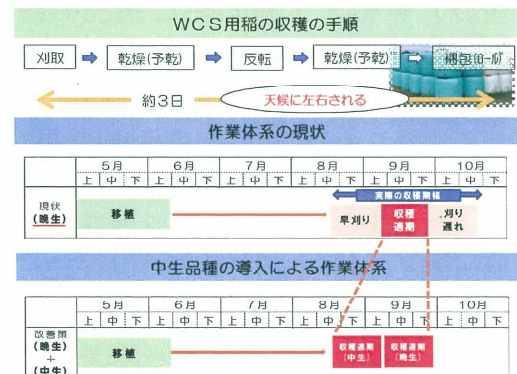


写真1.WCS収穫の手順と作業体系

(2) 中生品種の嗜好性試験

- ア 試験場所 東串良町内の繁殖牛農家2戸の牛舎
- イ 供試品種 ①ホシアオバ（中生）
②たちあやか（中生）
③ミナミユタカ（晩生）
- ウ 試験日 平成29年11月28～29日
- エ 方法 ①農家の給餌時間に合わせてWCSを給与。
②各品種30分間給与し、全頭が食べた量を計測する。



写真2.嗜好性試験の実施状況

3 結果及び考察

(1) WCS用稲の中生品種の栽培実証

ア 出穂時期は中生品種が8月3日頃、晩生品種が8月20日頃と約2週間の差が生じ、収穫適期と言われる黄熟期は、中生品種が9月2日頃、晩生品種が9月19日頃と予想された。（表1）

イ 成熟進度に明らかな差が見られたことで、中生品種と晩生品種を組み合わせることで作業労力の分散が可能であることが確認できた。

ウ 生草収量については中生品種が晩生品種の約9割程度となり、晩性品種が多い傾向に

あった。

表1 実証試験結果

品種	出穂時期	黄熟期	成熟度調査				
			穂数 (本/m ²)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	生草収量 (kg/10a)	乾物収量 (kg/10a)
ホシアオバ	8/3頃	9/2頃	261	82.4	21.1	3,386 (88.1)	1046 (77.4)
たちあやか			265	90.0	12.8	3,429 (89.2)	1,073 (79.4)
ミナミユタカ	8/20頃	9/19頃	205	104.2	29.1	3,844 (100)	1,352 (100)



写真3.WCS用稲の生育状況



写真4.現地検討会の様子

(2) 中生品種の嗜好性試験

ア いずれの農家でも中生品種を好んで採食した。(表2)

イ 中生品種の嗜好性には問題がないことが確認できた。

表2 実証試験結果

品種	採食量	
	A農家 (kg/頭)	B農家 (kg/頭)
ホシアオバ	1.4 (105)	1.91 (150)
たちあやか	2.8 (205)	1.91 (150)
ミナミユタカ	1.4 (100)	1.27 (100)



写真5.嗜好性試験での検討の様子

4 今後の課題

嗜好性にも問題はなく、収穫作業の分散も可能であることが確認できたが、中生品種の生産を拡大するには早期主食用米とのほ場の調整が必要であり、ほ場の団地化が不可欠と考えられる。

そこで今後は、中生品種の栽培実証面積を本年度の4倍の2haに拡大して、更に実証試験を行い普及上の課題を整理する。

5 活用上の留意点

中生品種の生産拡大には、地域における理解と協力が必要である。

実証試験の結果を踏まえながら、関係者と連携をとりながら導入の推進を図っていく。

6 取りまとめ者

中野 祐歩, 今村 正昭, 朝倉 由美子